

# Global Classrooms

## グローバル・クラスルーム 報告書

全米高校模擬国連大会への第4回日本代表団派遣支援事業



2010年6月  
グローバル・クラスルーム日本委員会  
Japan Committee for Global Classrooms

## Global Classrooms

## 目次

はじめに	2
グローバル・クラスルームとは	3
日本模擬国連とは	4
推薦の言葉	5
企画概要	6
派遣報告	7
受賞	11
参加者報告	12
支援協力団体一覧	30
会計報告	30
メリルリンチ日本証券より	31
グローバル・クラスルーム日本委員会	32
おわりに	33
参考	34



## はじめに

この度、全米高校模擬国連大会への4回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業にご協賛いただいたメリルリンチ日本証券様をはじめ、ご後援いただいた関係省庁・団体等、多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業では、2009年11月21-22日に東京の国連大学で行われた第3回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた5校10名の高校生が、日本代表団として全米大会に参加いたしました。今回はルクセンブルク大公国の大使として、世界21カ国、総勢約2500名の参加者の中に飛び込み、10名が10通りのやり方で会議に挑みました。

本報告書で大部分を占めているのは日本代表団10名の高校生の報告です。10名の高校生がアメリカ・ニューヨークでそれぞれが担当する会議の議場において感じたことが全て記されています。会議前、会議中、そして、これから将来に向けての各人の様々な思いが読み取れる内容です。その思いが今後のそれぞれの活動に少しでも刺激を与えるものとなるのであれば、私どもとしてこれ以上の喜びはありません。

最後に、本書が多くの人々に読まれ、日本における高校模擬国連活動の更なる普及と発展の一助になることを、そして、これから国際舞台に関わろうとする多くの人の活力につながることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご指導をよろしくお願いします。

グローバル・クラスルーム日本委員会  
2010年度 理事長 小檜山 歩



## グローバル・クラスルームとは

グローバル・クラスルームは、国連会議のシミュレーション（模擬国連）を通じて、現代の世界におけるさまざまな課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国国連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する学生は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、国連の手続規則を駆使して、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国国連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の中学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。

日本でも、大学生の模擬国連は20年以上の歴史があり、毎年全日本模擬国連大会が開催されています。そして2007年、かねてより若年層に対して国際問題を討議する際に欠かすことができない経済や国際金融の知識の普及活動をグローバルに行ってきたメリルリンチ社をスポンサーに迎えグローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第一回日本代表団の全米大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。

グローバル・クラスルーム日本委員会  
Japan Committee for Global Classrooms

## 日本模擬国連とは

日本模擬国連（Japan Model United Nations Society: JMUNS）は、日本で始めて組織化された模擬国連活動を行う団体です。

1983 年上智大学において、当時上智大学教授だった緒方貞子（国際協力機構理事長／元国連難民高等弁務官）の顧問の下、発足した「模擬国連実行委員会」を前身としています。当初は毎年ニューヨークで開催されている模擬国連会議全米大会（National Model United Nations Conference）への日本代表団の派遣を中心に活動を行っていましたが、委員会の規模拡大に伴い、日本における模擬国連活動を本格化させ、名称を模擬国連委員会に改名しました。また、2010 年から、模擬国連委員会は、名称を改めまして日本模擬国連となりました。

日本模擬国連は、模擬国連会議などの学習を通じて国際社会に貢献する人材を育成することを使命としています。日本模擬国連は国際社会を考える一つの方法であると同時に、価値観や国籍の壁を越えて人と人とのつなぐネットワークでもあります。また、国際社会に貢献できるたくさんの人材を育成・輩出し、当委員会の活動に参加していた先輩たちは、さまざまな省庁や国際機関、民間企業、非政府組織、学術機関など多分野に渡って国際社会に貢献する活躍をしています。

日本模擬国連  
Japan Model United Nations Society



## 推薦の言葉



明石 康

スリランカ平和構築・復旧・復興担当日本政府代表／元国連事務次長／日本国際連合協会副会長

高校生が模擬国連会議に参加し、地球規模の課題について学習・討議することは大変貴重な経験です。単なる英会話の練習以上のものです。真剣で知的な学習を通じて眞のグローバルな理解とともにコミュニケーション能力を高めることができます。日本の学生がこのような新たな挑戦に意欲的に挑むことを期待します。



緒方 貞子

国際協力機構理事長／元国連難民高等弁務官

国連は、世界各地で平和と安全の確立、人道援助や開発支援などの努力を続けています。日本からも一人でも多くの高校生が、熱意を持って模擬国連に参加し、国際情勢を学び、より良い地球社会を作っていく人材に育つよう、望んでいます。

## 企画概要

### 企画名称

2010 年度 全米高校模擬国連大会への日本代表団派遣支援事業

### 期日

2010 年 5 月 11 日（火）～17 日（月）

### 開催場所

米国ニューヨーク市

### 主催団体

グローバル・クラスルーム日本委員会

### 内容

5 月中旬に米国国連協会の主催により開催される全米高校模擬国連大会 (The 11<sup>th</sup> Annual UNA-USA MUN Conference) に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催の第三回全日本高校模擬国連大会 (Global Classrooms in Japan 2009) にて選出した高校生を日本代表団として派遣すること。同大会には米国国内の 21 都市を含む世界 21 か国から総勢約 2500 名の高校生が参加した。

## 代表団構成

### 1) 高校生 (10 名 : 次の 5 校より各 2 名)

- ・埼玉県立浦和第一女子高等学校
- ・渋谷教育学園渋谷高等学校
- ・渋谷教育学園幕張高等学校
- ・聖心女子学院高等科
- ・桐蔭学園中等教育学校

### 2) 引率者 (7 名)

- ・上記 5 校より教諭各 1 名の計 5 名
- ・グローバル・クラスルーム日本委員会より 2 名

## 派遣報告

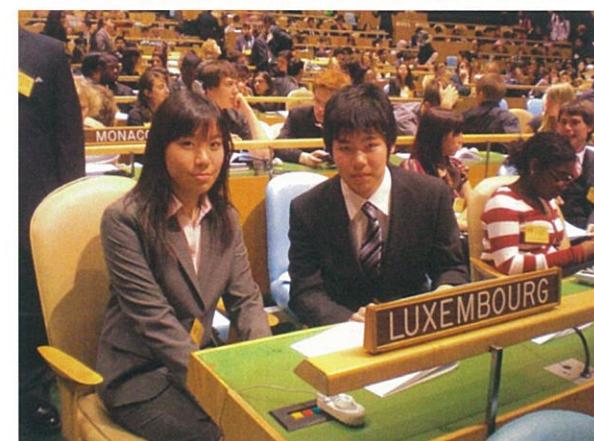
### 派遣日程

- |              |                              |
|--------------|------------------------------|
| 4 月 25 日 (日) | インフォメーション・セッション              |
| 5 月 11 日 (火) | NY 到着                        |
| 5 月 12 日 (水) | 国連日本政府代表部訪問<br>現地高校訪問<br>夕食会 |
| 5 月 13 日 (木) | 模擬国連会議開会式                    |
| 5 月 14 日 (金) | 模擬国連会議 1 日目                  |
| 5 月 15 日 (土) | 模擬国連会議 2 日目<br>閉会式           |
| 5 月 16 日 (日) | NY 出発                        |
| 5 月 17 日 (月) | 日本帰国                         |



### 参加会議

高校	担当会議	議題
渋谷教育学園渋谷高等学校	General Assembly 3 <sup>rd</sup> Committee	Evaluating Responsibility to Protect
聖心女子学院高等科	Nuclear Non-Proliferation Treaty-Western Group and Others	Non-Proliferation Review
桐蔭学園中等教育学校	United Nations Children's Fund	HIV and Young People
渋谷教育学園幕張高等学校	World Trade Organization	Intellectual Property Rights, Pharmaceuticals, and Less-Developed Countries
埼玉県立浦和第一女子高等学校	International Atomic Energy Agency	Nuclear Clean-up and Security



## 4月 25日

### 【インフォメーション・セッション】

メリルリンチ日本証券にて、渡米前の説明会および研究発表会を行いました。評議員による激励の言葉を受け、全米大会に向けて生徒たちも気持ちを引き締めていました。

研究発表会では、会議ごとに設定されている議題についてそれが調べてきたことを基にスピーチを行いました。生徒たちによる英語での発表、それに対するフィードバックを通して担当会議・議題の理解を深めてもらいました。

また、全米大会に参加した際の戸惑いを少しでも少なくするために今年度からインフォメーション・セッション前に練習会議を実施しました。その際には過去の全米大会派遣生も集まり派遣団にとっては貴重な時間となりました。



## 1st Day

### 【日本出発】

成田国際空港からニューヨークのジョン・F・ケネディ国際空港へ向けて出発しました。リラックスした様子も見られました。また、機内において会議の準備を進めるペアもいました。



### 【ニューヨーク到着】

ニューヨーク到着後はホテルに荷物を置き、その後、自由時間となりました。多くの高校生が国連ビルを見学し、会議への期待を高めていました。この期間、国連ではNPT再検討会議が開催されていました。会議に招待され訪米していた原爆の被爆者の方々と直接話す機会に恵まれた高校生もいたようです。

## 2nd Day

### 【国連日本政府代表部訪問】

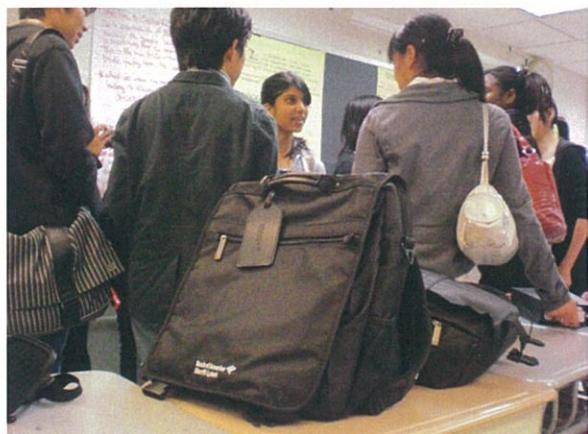
国連日本政府代表部を表敬訪問しました。角大使から、国連における日本の取り組みについてのお話や模擬国連会議に向けた激励のお言葉をいただきました。質疑応答では会議に関連する話にとどまらず、国連安全保障理事会改革のお話などもいただき、高校生にとってとても刺激的な時間となりました。



## 3rd Day

### 【開会式】

午後は全米大会の主催者の紹介で、現地の高校訪問を行いました。今年度はQueens High School for the Sciencesとの交流を行い、お土産の交換や同校の近所の散策をしました。有意義なひと時を過ごしました。



### 【夕食会】

この日の夜は、グローバル・クラスルームのブラジル委員会の派遣生と夕食を共にしました。会議以外の場でも貴重な異文化交流をすることができました。高校生もかなりリラックスした様子でした。



## 4th Day

### 【模擬国連会議 1日目】

模擬国連会議が滞在先のGrand Hyatt Hotelで行われました。初めて参加する世界規模の模擬国連大会に緊張していたようですが、公式発言や他国との交渉を積極的に行う派遣生の姿が見られました。



## 5th Day

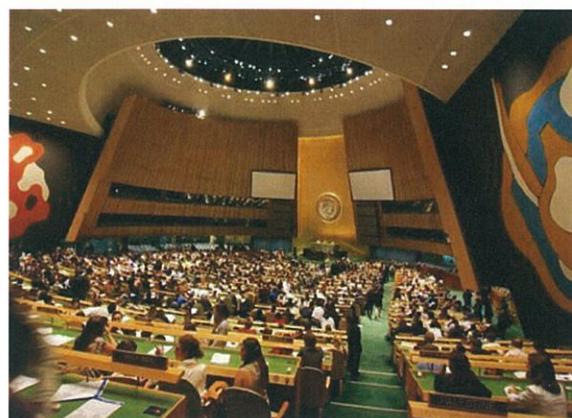
### 【模擬国連会議 2 日目】

2日目も Grand Hyatt Hotel で会議が行われました。派遣生はそれぞれ他国との決議案作成に向けて最後まで粘り強い交渉を繰り返し行っていました。最後まで議場を走り回り交渉をしていた高校生が印象的でした。昼休みには小林いずみ世界銀行グループ 多数国間投資保証機関（MIGA）長官とお話しする機会に恵まれ、高校生にとって刺激的な時間となりました。



### 【閉会式】

会議終了後すぐに、開会式と同様、国連総会本会議場で閉会式が行われました。閉会式では、渋谷教育学園渋谷高等学校と渋谷教育学園幕張高等学校の2校の生徒が Honorable Mention を受賞しました。生徒全員は大きな疲労の中でも達成感と充実感に満ちていました。



## 6th- 7th Day

### 【ニューヨーク出発・日本帰国】

長い日程を終え、ジョン・F・ケネディ国際空港を出発し日本に帰国しました。高校生は名残を惜しみながら、派遣でのいろいろな感情を胸の中にそれぞれ帰路につきました。



## 受賞

### 【Honorable Mention 賞】

Luxembourg

渋谷教育学園渋谷高等学校

General Assembly 3<sup>rd</sup> committee

Luxembourg

渋谷教育学園幕張高等学校

World Trade Organization



## 参加者報告

### 小檜山 歩

国際基督教大学教養学部アーツサイエンス学科3年  
グローバル・クラスルーム日本委員会 理事長

まず初めに、今回の派遣支援事業にご協賛いただいたメリルリンチ日本証券様、ご後援いただいた諸団体の皆様並びにグローバル・クラスルーム日本委員会に関わってくださった全ての方に御礼を申し上げます。今回の派遣支援事業は多くの方々のご支援、ご指導がなければ実施できなかつたことを改めて確認するとともに深く感謝申し上げます。

今回の派遣支援事業には当委員会理事長の私、小檜山がアドバイザーとして、理事長補佐の杉村が会議スタッフとして派遣団に同行させていただきました。この派遣支援事業の報告として事業に参加した高校生の会議への取り組みから感じたこと、及び日本における高校模擬国連の重要性の2点について以下で述べ、私の派遣報告としたいと思います。

まず1点目の高校生の会議への取り組みから感じたことを記す前に、高校生たちが会議に臨むにあたって直面した課題についてアドバイザーとして同行した私から短く記します。事前準備の段階では今回の派遣団には海外在住経験がない生徒が多いことなどから英語に対しての苦手意識が散見されたように思えます。今年度から新たな取り組みとして渡米前に練習会議を開催したのですが、その際にも個々人の英語の運用能力に大きな差がありました。また、研究発表会における質疑応答においても同様であり、会議における一番の不安要素であったことは断言できます。しかしながら、毎年の日本代表団の特徴である知識・政策立案のレベルの高さは今年度も継続されており、大学で模擬国連に取り組んでいる私自身も驚かされる知識の豊富さと論理性でした。

このような条件の中で全米大会に参加した5組10名の会議への関わり方は様々でした。1日目終了後にミーティングを開き各々が初日の会議で直面した課題に対して、アドバイスを提供するなどして打開策を練りました。それを受けた翌2日目。それぞれの会議行動を見ると、グループリーダーとして最後まで会議を駆け抜けたペアや後半から会議の中心として参加した

### Global Classrooms

ペア、グループの中心とはなれなかったが意見を出すことによって会議の成果文書に自分たちの主張を盛り込むペアが見られました。

この全米大会全体への高校生の取り組みの中で高校生の底力と誠実さを強く感じました。今回派遣した高校生の知識や追いかれた時の力はとても大きく大きかったです。何人かの高校生は議場においてかなり精神的に追いかられた時間もあったようですが、全ての高校生がその精神的なプレッシャーに負けずに会議に誠実に向かって行ったのです。自分たちの弱点も受け入れ会議で今の自分に出来る限りのことをしていた全ての高校生の行動は、今回出来なかったことでも将来出来るように間違いなくなると確信させる行動であったと言えるでしょう。いくつかの点で尻込みしていた高校生もいたようでしたが、それも反省として受け止めることによつて将来につながることを期待しています。

2点目に日本における高校模擬国連の重要性について述べます。この派遣支援事業は今回で4回目となり今後も継続していきたい意義のある事業です。その反面、様々な制約によって、全日本高校模擬国連大会で選ばれた10名のみが参加する事業とならざるを得ません。全日本模擬国連大会と全米大会派遣支援事業がセットで運営され4年が経ちましたが、高校模擬国連という活動が年を重ねるごとに広まり、定着してきていていることを実感します。そうした中で個々の学校に経験・ノウハウが蓄積してきたという話も聞きます。しかしながら、アメリカ大会や高校訪問などで痛感したのはアメリカと日本では模擬国連の普及の度合いにまだ大きな差があるという事実でした。今回の高校訪問で訪れた学校は理系の学校でありながら多くの生徒が模擬国連に取り組んでいました。また、アメリカにおいては「模擬国連」という単語が一般的に通じる単語として理解されているようで、日本との土壤の違いを強く感じました。この模擬国連の普及の違いは今回の渡航中に角大使や小林長官がお話をしていた「日本人が国際社会で十分活躍していない」という現状の1つの要因になっているのではないかでしょうか。国際社会で活躍するタフ・ネゴシエーターとしての能力を鍛えるために模擬国連というものはもっと日本において普及してよいと強く感じます。

秋には今年も全日本大会が予定されています。この成功こそが日本における模擬国連の普及につながる、との使命感を持って運営に臨みたいと思っています。

最後に、今回の派遣の引率者として協力してくださった各学校の関係者の皆様、高校生の皆様並びに保護者の皆様に感謝を申し上げます。至らない点もあるなかで本当に協力してくださった皆様なくしては今回の派遣は執り行なうことが出来ませんでした。また、今回の派遣事業にご協賛いただき大きな協力をしてくださったメリルリンチ日本証券の関係者の皆様に深く感謝し、私の報告とさせていただきます。



**杉村 詠史**

青山学院大学教育人間科学部教育学科2年  
グローバル・クラスルーム日本委員会 理事長補佐

グローバル・クラスルーム日本委員会の存在を知ってから8か月、その活動に従事するようになってから4か月。高校生の模擬国連という言葉に惹かれて、将来の夢にも繋がると思ってメンバーに加入したところ、全米高校生模擬国連大会の運営スタッフまでやらせていただくという、素晴らしい機会に恵まれました。そのことに感謝し、以下、今回の渡米を通じて感じたことを記します。

まず始めに、グローバル・クラスルームのその規模は驚愕の一言に尽きました。アメリカ本土や日本、近辺だけでなく、世界中のありとあらゆる国の高校生が、全米大会に参加するのですから、とてもすごいことです。これは、長い歴史を持っている模擬国連の魅力が、人々を惹きつけるからと言うことができます。その魅力というのは、広い視野で物事を見る力、スピーチ力、プレゼン能力、交渉力、英語を母国語としない話者から見ると英語で話す力、どのように様々なスキルがつくこと、さらには、自分とは違った視点を持った人と話すことが出来る、ということです。高校生の時に、こういった経験を出来るということは非常に素晴らしいことです。グローバル・クラスルームの理念は「国際社会に活躍する人材を輩出する」ですが、参加了高校生—日本の学生のみならず—には、そういった人間になってほしい。そういう思いでスタッフの仕事に従事しました。

次に、私がスタッフをしていて気付いたことを書きます。大学の模擬国連では1年次の冬から運営に携わります。私も例外ではなくそうでした。運営に携わるようになってから4か月、自分ではかなり運営も出来るようになっていると感じていましたが、渡米して、その考え方の矮小さを知ることになりました。本当に同じ学生なのか、同じ年代なのかと思うほど、各自てきぱきと動くし、一番上で指示を出す人や各役職各グループのリーダーは、適宜その場に合った行動をとり、人を適切に動かすのです。マネジメント能力が違うのです。また、会議の規模が大きく、スタッフも一人の負担が大きく、仕

事量が多いにも関わらず、てきぱきとこなしていく姿、そんな中でも笑顔を絶やさず働く姿勢は、今思い出してもすごかったと呟く他ありません。

今回の渡米を通して、会議のスタッフを通して、様々なことを感じ、様々なことを培いました。それらを、これからグローバル・クラスルーム日本委員会の運営に生かしていきたいと考えています。また、「高校生の模擬国連」という素晴らしいプログラムを、日本でもっと普及させていき、「国際社会に貢献できる人材の輩出」という重要な役割に、より積極的に携わっていきたいと強く思います。

インフォメーション・セッションにも派遣生へのアドバイスなどのために駆けつけてくれたOBOGの方々、引率教員の方々、メリルリンチ日本証券の方々、国内外を問わず、国際社会の多方面で活躍されている評議員の皆様、大学生理事と、多くの皆様が協力してくださいました。その今回の派遣事業を支えてくれた皆様に感謝を申し上げ、参加者報告とします。

**佐藤 千紘**

埼玉県立浦和第一女子高等学校2年

喜びよりも驚き。楽しみよりも不安。

約半年前、憧れのニューヨークへの切符を手にした私の気持ちはこうだった。初めて参加した模擬国連で、後悔する点が多く、来年こそはNYを目指そう!とパートナーと話していたところ、ドイツ大使の名前が呼ばれたのだ。

全米大会への準備はポジションペーパーの作成を中心に、リサーチ→パートナーと議論→リサーチ……の繰り返しだった。私たちは、政策を何度も何度も練り直した。

担当国であったルクセンブルクは一人当たりのGNIが世界トップレベルで金融業が盛んな豊かな国ではあるが、正直、どうもインパクトに欠ける…。更に、英語どころかフランス語の資料が多く情報がなかなか集らない。逆に議題であったNuclear Clean-up and Securityは、旬の話題であった為に、情報が次々と更新されていき情報処理におわれる…。そして、ようやくある政策が思いついても、更なるリサーチをすると、批判点ばかり見えてきて、もう一度振り出しに戻る…。

政策立案はまさに終わりのない戦いで、調べれば調べるほど先が見えなくなるような時もある。しかし、Positiveを合言葉にしている私たちは、集められるだけのデータをもとに、自分達の納得がいくまで、議論に議論を重ねていった。そもそも、私たち高校生が簡単に思いつくような政策で、問題が解決するなら、こんな世の中にはっていないはずだから、大変なのは当たり前なのだ。

そして、会議1日目。

私たちが参加したInternational Atomic Energy Agency(国際原子力機関)の会議は、144ヶ国288人の大使から成り立っていた。まず、単純に人数の多さに驚いたのは言うまでもない。学校で言うと、一学年分くらいの人数である。

英語が出来ない私たちは、こうなったら、こう言おうという何通りもの台詞まで用意して会議に臨み、Unmoderated Caucusでドイツや、フランスなどの大使に自分達の意見を話してみたのだが、いいね!と言われても、その先に議論を進められず、なんとなく自分達の政策と似ているDRのグループに参加するだけで終わってしまった。

そして、2日目。

なんとか他のDRに自分達の主張を入れようと、交渉に行ったら、なぜか何の反論もされずあっさりOK…で拍子抜け。もはや、もうほとんど議場が議論の場ではなくなっていた。ほんの一部の人が必死でDRを書き、あとの大勢は、おしゃべりタイム、友達作りタイム…。Moderated Caucusで話すのはみんな自分自身の主張だけ。どのDRにも参加せず、交渉もしようとしない大使もたくさんいる。スタッフからは何度も静粛にと注意される…。なんのためにこんなことをやっているのか?みんなわざわざNYまで何しに来ているのか?ほとんどの大使はDelegate Danceに参加するためだけに会議に参加しているのか…?こんな会議ではいけないと思いながらも、どうすることも出来ずにうじうじとしている自分に失望し、おしゃべりを楽しむ気力すらおきなかった。

今回の会議を振り返ってみて、上手くいかなかつた理由は数え切れないくらいあるけれど、第一に、私たちは、調べたり、考えたりすることは出来ても、それを相手に分かりやすく伝え、説得し、全体の主張にしていく技術を身に付けていなかつたのだ。もちろん、英語という言葉の壁もあったが、それだけではない。むしろ、英語が出来ても、まったく交渉が出来ない大使もたくさんいたのだから。主張の仕方や、相手の話の聞き方、議論の展開の仕方…をこれからもっと磨いていかなくてはならないと痛感した。これは、私たちに限らず、今日の日本人の多くに当てはまるのではないか?

また、正確さ、完璧さが要求されないアメリカでも、アメリカ人の目立ちたがりや精神に流れすぎ、日本人としての、真面目さや論理性を完全に忘れてしまってはいけないと感じた。そして、その日本人の特性を十分に発揮するた

めにも、それを伝える英語というツールは絶対に必要であると再認識した。

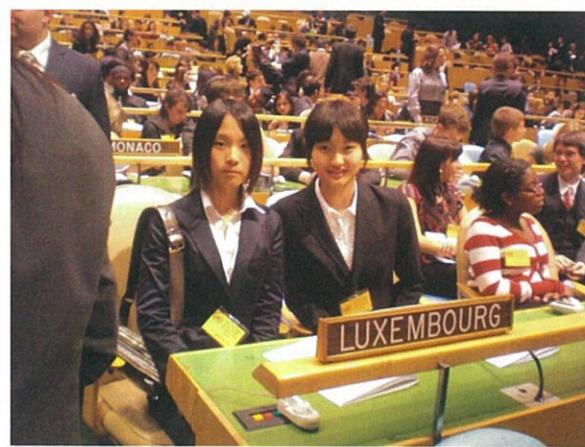
会議は上手くいかなかったが、NYで過ごした一週間は本当に素晴らしいものであった。GAホールの席に座り、国連事務総長のスピーチを聴き、世界各地から集った同世代の高校生と議論を交わす…こんなに幸せな日本の高校生は何人いるだろうか？

私は、NYで、これから自分がどう生きていべきかに対して大きなヒントを得られ、新たな目標を見つけることが出来た。もちろん、負けず嫌いの私は、今回の悔しさをいつか絶対に晴らそうと心に決めている。

また、一緒にPositiveに頑張ってきたパートナーの毛塚さんを含む個性あふれる9人の派遣生と出会えたことも、たいへん大きな収穫である。彼らの、英語力といい論理性といい社会に対する関心といい、同じ高校生とはとても信じがたかく多くの刺激を受けた。

最後に、準備の段階からお世話になりましたJCGCの皆様、メリルリンチ日本証券様、ご指導いただいた先生方、その他の関係者の方々、本当にありがとうございました。

こんなにも貴重な体験をさせて下さった皆様への感謝の気持ちを忘れずに、この経験で得られた、たくさんの悔しさと少しの自信を胸に、何事にも意欲的に取り組んでいきたいと思います。



### 毛塚 もも

埼玉県立浦和第一女子高等学校 2年

飛行機を降りたらアメリカ合衆国——心の中では信じていない自分がいた。

生まれて17年目にして初飛行機、初海外。そんな記念すべき機会が、この全米模擬国連大会であることに、喜びと、緊張と、強い不安を覚えていた。日常会話もままならない自分に何ができるのか？飛行機の窓から眼下に広がる合衆国の国土を目にした瞬間、そんなことも思考から消えた。

私達はIAEA国際原子力機関の会議に参加しました。議題は、Nuclear Cleanup and Security（核物質の安全処理と管理）。今まさに急変動中の議題で、その分、リサーチをしていると、様々な角度からこの議題について書かれた資料を手に入れることができました。逆に、軍事的内容も絡んでくるこの議題では、一般には明らかになっていない情報も多く、また、各國の態度も時々刻々と変化しているため、大変取り組みにくいとも感じました。私達は、核物質の管理の安全性を向上するためのデータベース作成を政策の軸として、会議に臨みました。

会議が始まって、まずすぐに感じたことは、周りの高校生の英語が速すぎて聞き取れないということ。自分の話すスピードは、会議という場では、まともに聞いてもらえないということ。普段はマイペースだと言われる私だけれど、この時はものすごいパニックに襲われました。話しかけても相手の主張はあまり理解できないし、自分達の主張も理解してもらえない。英語に堪能でない私達が、日本大会ではフル活用していたUnmoderated caucusも、（実際は大体10分のものばかりだったけれど、）日本大会よりも時間が長く感じられました。Moderated caucusの動議をどうかとも思ったけれど、気おくれてしまい、結局とることができませんでした。そして何より焦ったのが、「核物質の管理の安全性」を、政策の主軸にすえている国が少なかったこと。全体的に、「放射性廃棄物の具体的な処理方法」についての政策がほとんどであったため、かなり包括的な案である私達の政策は、その有効性を詳しく説明する必要

がありました。残念なことに、会議当初に何力国かに説明を試みたけれど、あまりいい反応が返ってきませんでした。その時点で、自分達の提案を議場に残すことを、半ば諦めてしまいました。粘るということを捨てて、楽な方に流れてしまったように思います。一日目ですでに、自分の語学力のなさ、集中力のなさ、度胸のなさが本当に悔しく感じられました。政策をあまり受け入れてもらえないから、もっとたくさん的人に話してみるべきだったと後悔しました。

その日の夜は、気持ちを切り替えるのに苦労しました。先生や大学生の方々から、アドバイスをいくついただき、二日目はもっと同じグループの国の人と話して、自分達の政策の文言を、決議案にいれてもらおうと考えました。朝のうちは、配られる予定の自分達のグループの決議案を読んで、その決議案のどこにルクセンブルクの文言を挿入してもらうか、交渉しようと思っていました。しかし、実際にその決議案が配布されたのは投票の少し前で、「英語が聞き取れないなら、書かれているものを読んで理解しよう」と考えていた私には、時間が足りなくなっていました。しかしそこで、パートナーの佐藤さんが、他のグループの大天使と交渉して、ルクセンブルクの文言を決議案に盛り込む、と承諾してもらうことができました。自分が属しているグループの決議案でも、そうじゃなくても、とにかくルクセンブルクの主張が少しは議場に残せたのかなと思い、少し嬉しかったけれど、自分はまた何もできていないことに気付いて、とても申し訳ないし、悔しいと思いました。

IAEAの会議の議場において強く感じたのは、前々から聞いていたように、「目立つ人が注目を浴び、評価される」ということです。日本大会であれば、Moderateで全体の前にでてスピーチするには、それなりの内容があり、会議への影響力があることを話すのが一般的だけれども、このIAEAの会議では、一回のModerateで何力国もの大使が、同じようなことを何回も述べるという、無駄な場面も多かったです。決議案が提出されてから、配布されるまでの時間もかなりかかり、やることがなくて時間を持て余す参加者も多かったです。

しかし、そんな議場の流れを変え、自國の主張を最後まで推し続ける根気と行動力と英語力があれば、こんなふうに感じながらも、何もできずにいることもなかつたのだろうと思いました。

今回の私の模擬国連は、個人的にはボロボロで、思い出すのも嫌になるほど、歯がゆい想いでいっぱいの会議になってしまいました。パートナーの佐藤さんにもたくさん迷惑をかけたし、日本で応援してくれた人達に良い報告もできませんでした。同学年または一つ上のGC JAPANの仲間の活躍にもすごい刺激を受けたし、自分の未熟さを思い知りました。私には勉強しなければならないものが、こんなにもたくさんあるのだ、と痛感しました。柿岡先生が「この経験はまさに入口」とおっしゃっていました。本当にその通りだと思っています。私は絶対模擬国連にリベンジします。

最後に、渡米前から私達をご指導、激励してくださった、野田さんを始め、GCの大学生の方々、先生方、応援してくれた家族、部活や学校の友達…そして、今回一緒に渡米した第4期の9人の仲間に、心から感謝しています。本当に、ありがとうございました。



## 大島 華奈

渋谷教育学園渋谷高等学校 2 年

今回私は「保護する責任」と言う議題の会議に出席した。「保護する責任」とは、自国民を保護することができない、あるいは保護する意思のない国家に対し、国際社会全体が当該国家の保護をうけるはずの人々に対して「保護する責任」を負うという新しい概念である。今まで国連で議論されたことは数回限りであったため、どこを焦点に置くのか全く想像がつかなかった。その上担当国であるルクセンブルグは軍隊が小規模であるため自国との繋がりを探るのに苦労した。しかし、「保護する責任」には武力を要さない「予防する責任」があり、そこではルクセンブルグが積極的に取り組んでいる人権の保護や良い統治の構築が含まれていたためなんとか自国の立場を固めることはできた。

会議一日目、speakers list の後の方に載ってしまい、unmoderated caucus でも 160 カ国が出席している広い議場で思うように国を探せず焦っていた。日本大会と違って会議監督は unmoderated caucus の回数を制限していた。なるべく全員に公式発言の機会を与えたかったようだ。そのため計画通り EU 諸国で集まることはできなかつたがなんとか立場の似た国を集めることができた。しかし、集まつたのは 10 ケ国程度で提出に必要な 29 ケ国には程遠かっただ。それでも私は DR の内容を誰よりも固めることができる自信をもっていた。DR の質で勝負すれば絶対に国は集まると何回も自分に言い聞かせた。一日目の終盤によく公式発言の機会がやってきた。発言後、同意国からどんどんメモを回され、あつという間に 30 カ国以上集まつた。幸いなことに DR 提出期限は二日目の昼であったため、一日目の夜に納得のいくものを作成することができた。

会議二日目、会議に飽きたためか、欠席する大使、爆睡する大使、メールを打つ大使、宣戦布告のメモを回す大使、ナンパをする大使、読書を始める大使など様々な衝撃的なものを見た。一日目同様、二十回以上プラカードを上げたが一回しか呼ばれなかつた。DR を PR する機会が少ないので DR が否決されないか心配だった。自分が担当した質疑応答も自分として

は納得のいくものではなかつたため気分はよくなかつた。しかし結果的に自分の DR は可決されてひと安心した。可決された瞬間、周りの大使に「おめでとう」「本当によくやつたよ」と言われて大きな達成感と喜びを感じた。

この経験を通して、私は日本大会とアメリカ大会の相違点をいくつか感じた。  
 ①会議監督は会議の進行方法や動議の上げ方に関する質問を積極的に受け付ける。初めての模擬国連を経験している人も多いため、とても親切に質問に応じてくれる。  
 ②会議監督がパソコンの乱用を懸念しているため、会議場でパソコンは使わない。  
 ③DR は全て手書きで、前もって準備してくることは禁じられている。提出期限は特に定まっていない。  
 ④服装はかなり自由である。特に印象的だったのは帽子をかぶっている大使、12cm 以上のヒールを履いた大使、膝上 20cm 以上のミニスカートを穿いている大使など  
 ⑤会議中に講演会が始まる。私の出席した会議では議題を研究している NYU の博士が 40 分間スピーチと質疑応答をした。  
 ⑥会議中に大学説明会が始まる。フロントが大学に関する質問時間を 30 分設けた。  
 ⑦moderated caucus が多くても国数が多いため発言の機会が少ない。発言をするためには他の大使にスピーチ時間を yield してもらう方法が良い。  
 ⑧昼休み中に交渉はない。会議が終わると皆あつという間に退場する。  
 ⑨トイレに行くにはバスが必要なため、簡単に行くことはできない。  
 ⑩日本、アメリカ、韓国、ドイツ、スペイン、ブラジル、中国など世界中から大使が集まつていて各国がいかにユニークか知ることができる。

もう一つ、この経験を通してとっても大事なものを得ることができた。それは日本人としての意識である。日本にいる私は帰国生であり、一般生と比べて日本語の知識や日本人としての意識が欠けているのは仕方がないと考えていた部分があつた。しかしアメリカに行くと私は「帰国生」ではなく「日本人」として見られた。だからこそ、もっと日本のこと理解して、「日本人」と胸を張って言えるようにならなければならないと感じた。私は模擬国連を通していつも多くのものを得る。国際問題への関心だけでなく、仲間も増え、人間としても成長する。これから派遣生にも自分の力を信じて、

## 岡 祐司

渋谷教育学園渋谷高等学校 2 年

失敗を恐れずに活躍してもらいたい。この機会を下さった方々や応援してくれた方々には心から感謝をしている。本当にありがとうございました。



ニューヨークを訪れたのは今回が初めてではない。記憶にはあまりないものの、ひとりの観光客として自由の女神を見たり、タイムズスクエアに足を運んだりしたことがある。しかし、今回はルクセンブルグ大使としてニューヨークに来ることになった。この違いは数え切れないほどあるが、最も大きな違いは責任感というものだ。全日本の大会で選ばれたということだけではなく、ルクセンブルグの代表として国連の総会に出席する気持ちで挑まなくてはならなかつた。会議 1 日目、緊張と期待で震える体を落ち着かせ、フロントが出席を取り終わるのを待つ。僕たちが参加した国連総会第 3 委員会は主に人権問題や人間の安全保障を取り上げ、今回の議題は「Responsibility to Protect (R2P) (保護する責任)」であった。R2P とは、自国民の命を脅かすような政治や紛争が行われている国に対して国際社会全体がその人民を守る責任がある、という概念である。R2P は基本的に受け入れられているが、まだコンセプトとして新しいため、現在あまり機能できていない。また、最終手段としての軍事力の行使の有無など、争点は様々である。

今回の会議の目的として、まず R2P の重要性を再確認し、世界的に認められた理念とすること。そのためには、R2P を軍事介入の言い訳だとして反対している国を説得することが先決であると考えた。そして次に、まだ具体性に欠けている R2P の概念を深めることがあげられる。R2P は細かく予防する責任、対応する責任、再建する責任の 3 分野にわけることができるが、それぞれを肉付けすることを意識した。会議戦略として、ルクセンブルグは EU の一員として、特に予防する責任を重視した決議案を出そうと考えていた。

しかし、実際に会議に入ってみると unmoderated caucus はしばらくとれなかつたので EU の国と意見を交わすことできなかつた。さらにフロントの誤解でノート回しが 1 日目の午前中禁止にされてしまったため、コミュニケーションをとる手段が少なかつた。そして、今回の会議で最も苦戦したのは発言する機会を

もううことだった。第3委員会は150カ国も集まる巨大な会議であり、moderate caucusでは何度もプラカードをあげたが、1日目には呼ばれずに終わってしまった。

僕が今回のUNA-USAの大会に参加して痛感したのは自分の発言力の弱さだった。全日のときと同様に大使と接するときに自分の意見を伝えることができたが、果たして相手と情報を共有することができたかは不安があった。会議の規模が大きく、すべての方向に目を向けていられなかつたのはあるかもしれないが、それよりも自分の力不足だったと思う。

そこで、これから模擬国連を続けていくときには意識していくのに3つのことが大切であると思う。模擬国連をやろうと思っている人にも是非考えてもらいたい。第一に英語力。単に話す能力だけではなく、相手の意見を聞き取ることも必要だ。特にmoderate caucusの発言は一度しか聞くチャンスがないので、常に集中しなくてはならない。そして、UNA-USAではアメリカだけではなく、様々な国から大使が集まるので、アクセントにも注意したい。いつも相手がわかりやすいようにシンプルな英語で話すこと、相手もこちらを考慮してくれるはずだ。第二に、自信を持って参加しなくてはならない。アメリカ人は押しのが強いとよく言われるが、まさにその通りだった。数多くの大使が自分の主張をズイズイと押し付けてくる。相手に圧倒されないようにするだけで精一杯になってしまふと悲しい。攻撃は最大の防御ともいうように、守るだけでは何も始まらない。これは相手に耳を傾けずに強引に自分の意見を押し通せと言っているのではなく、まずは自分の考えを表に出すということだ。そして第三に、最も重要なのはリサーチしたものを頭の中にストアしておくということだ。調べたものがあってもそれをいつ出せばよいのか、質問に対してどのように返答するのかは大切な仕事である。いつも資料を引き出せるように、会議の前から用意しておかなくてはならない。この点に関してはパートナーの華奈はとても優れていたと思う。彼女はリサーチする能力に長けているだけでなく、しっかりとそれを活用することができていてとても心強いことだった。

会議の外で僕は他にもいろんな貴重な経験をした。まず、滞在二日目の日本大使館の訪問や世界銀行の小林長官との対談。今現在世界で活躍されている方々の話を聞くことができた。また、ホテルでは偶然にもIAEAに招待されていた日本の被爆者の方と話す機会があった。いろんな方面で日本人の方が活躍していることを観察し、国の誇りに思うことができた。さらに他の文化とも触れ合うことができた。ホテルの部屋をブラジルの代表と一緒にすることで話をすことができた。たとえ地球の反対側で生活しても、同じことに興味を持てる、という素晴らしさを実感した。特にエルビオという同じ17歳の男子は自分と同じく教師になりたいという夢を持っており、日本人以上に共感するところがあったと思う。このような人々と接することで、たとえ表面に現れなくても、自分の中の何かが変わったと思う。

最後に、今回のNY派遣に携わった方々に心から感謝の気持ちを述べたい。いつも陰で自分を応援してくれた家族、友人、先生方。そして様々な形で支えてくださったGCの方。そして一週間をともに過ごした模擬国連のみんな。この経験を一生忘れません。



## 名取 徹

渋谷教育学園幕張高等学校 3年

模擬国連には野球のように勝ち負けがはっきりつかない。いや、むしろ本来の教育的な観点からみればリサーチをして、議論し、妥協して、決議案をまとめ上げていくプロセスの方が重要で、決議案が可決されるか、どれくらい国益を守ったかというの結果としては重要だが軽視されがちなのではないかと思う。それはそれで大いに結構なことではあるが、参加する者としてはやはり国益を考慮した当初の目標をどれくらい達成できて、また交渉の成果である自分の決議案が可決されるかは大いに興味のあるところである。今回全米模擬国連で私は多く外国人と交渉し、話し合い、さらに日本人である派遣団の人ともこの大会について話し合った。議題の概要、決議案、会議の流れ、そしてルクセンブルク大使としての会議行動を振り返る中で全米大会の特徴や外国人(多くは米国人)と交渉していくなかで気づいたことを指摘し、総括及び報告としたい。

今回我が世界貿易機関(以下WTO)では10本の決議案(以下DR)が濫立する状況となったのだが、可決したのはわずかに2本であった。議題である『Intellectual Property Rights, Pharmaceuticals, and Less-Developed Countries(直訳:知的財産権、薬物、最貧国)』は典型的な先進国vs発展途上国の対立構造をとっているが、近年先進国側の大幅な譲歩によって非常に解決がみえてきているものである。簡単に国際協調路線へと進むことができそうであるにも関わらず、なぜ決議案がここまで出たのかについて考えてみたい。

今回可決された二つの決議に注目してみると、全150ヶ国中70ヶ国以上のシグナトリー・スポンサーを抱えたカナダのDRとスポンサーがわずか10ヶ国程度、シグナトリーを加えても30程度のあった我がルクセンブルクのDRである。私にはこの2つのDRは相反しあうDRに見えたのだが(これについては下で述べる)、そのことに気づかず両方のDRに賛成票を投じた大使も多かったであろう。DRを見比べあう時間が少ないという問題もあったが、一番の問題はこの議題の解決方法として提示されている

Compulsory Licensing(強制実施権 以下CL)と並行輸入(Parallel Importing)の仕組みが非常に複雑であることである。これに加えてPublic-Private Sectors(官民合同企業)について触れた"欲張った"決議案が多く見られ、その微妙な差異によってDRグループが形成され、DRが濫立していったように感じた。また決議案を提出するために必要なスポンサー(賛成である国)に縛りがなく、シグナトリー(その決議案は議論する価値があると認める国)とあわせて全ての国の中でも20%あればよいという全米大会ならではの緩さもあるだろう。

さて、我がルクセンブルクのDRはグループ内の主導権を掌握したのが功を奏し、国内に多くある製薬会社の利権と特許の優遇措置による企業誘致とそれに依存した国家財政という面で国益を守り、さらにこの問題の解決に向けて現実にEUが提言していることに沿った内容の決議案を提出することができた。また上記のような"欲張った"決議案にならないようCLに集中して内容を充実させたことも他国の支持得やすかった理由にあげられると思う。グループを安易に拡大させず少數の国々で話し合えたことも密度の濃い決議案を作成可能にする大きな要因だと感じた。実際大所帯を抱えたカナダのDRは修正の際にスポンサー全員の賛同が得られず非友好的修正案(採択されてもほとんど決議としての意味を持たない)として提出せざるを得なかった。これらは共通した目的意識のもとで強い団結力を誇った全日本大会でのDRグループの成功体験が活きたといえるだろう。また全米大会は公式討議が多いとの話ではあったが、WTOの議長は非公式討議も積極的にとっていた。会議の進行する方向は議長次第ではあるが、早くこれに気づいたこともよかったと思う。

さて、ルクセンブルクの初日の会議行動は失敗であった。会議開始早々事前の計画通りドイツやイギリスをはじめ多くのEUを集めたまではよかったです、DRがグループがある程度固まったという私の認識のミスで相方には大変な思いをさせてしまった。スポンサー集めのためにカナダのDRグループと話し合っている最中に、お互いがお互いの意見を主張しあって議論に入れなかったEUの方のDRが午前中のうちに空中分解してしまった。またカナダのDRの主要

メンバーと CL の下で薬を生産する企業がそれで経済的利益を得てよいのかということで折り合いがつかずにいた。ルクセンブルクは製薬会社を代弁してそこに経済的利益がなければ薬を生産する工場を持つ企業が薬を作るはずがないという現実論を主張したが、相手の企業は利益を得なくても社会的使命感(Goodwill)で生産してくれることに期待するという理想論をぶらさげた。結局ベルギー、バチカン市国、アルバニアなど 5 カ国に縮小していた自分の DR グループを連れて、理想論と妥協してカナダのグループ入りを考えた。

しかし午後にはやはりルクセンブルクのボトムラインである製薬会社の利益は譲れないとしてカナダは諦め、アルバニアが出入りしていたグループへの加入と CL の文言についてルクセンブルクの政策を入れてもらうよう試みたが失敗に終わった。そして午後になってまた一から独自の DR 提出を目指すことにしたが、この時ルクセンブルクと行動をともにしてくれていたのはバチカン市国のみで、ほとんどの国がすでにどこかの DR のスポンサーである厳しい状況だった。その日は DR の草案をつくり、その間に公式討議で CL の集中した DR を提出することを協調して、すでにどこかのスポンサーになっている国々を数ヶ国重複でスポンサーになってもらい、最後に他の DR を離脱して行動をともにしてくれたエジプトの協力を得た。

それでも情勢は厳しかったが、2 日目のはじめに残りのシグナトリーを集め公式討議で CL に集中した決議案を出す予定であり、スポンサー・シグナトリーが提出に足りていること、さらに自国の意見が自分の DR に反映されていないことに不満を持つ国や、賛同国が足りていない DR グループを受け入れる用意があることを強調すると状況は好転した。賛同国が次々と現れ、初日に離れていたドイツなどの EU 諸国も戻ってきて、また多くの国々が公式発言でルクセンブルクの DR に協力しているといってくれたのは強い追い風になった。また DR グループの多くがルクセンブルク主導の敵対 DR に対するネガティヴ・キャンペーンに協力してくれ、結果として否決や、大量の賛同国を得たカナダをも非友好的修正案を提出せざるを得ない状況まで追い込むことができた。また相方の活躍に

よりルクセンブルクは順調に決議案の提出、修正案の提出もすることができ、小差ではあったが決議案を可決させることができた。支持してくれた多くの大使に感謝したい。

最後にエジプトやリトアニアなどの国々との強い信頼関係に支えられ決議案提出まで漕ぎ着けた事を特筆したい。誰にも話を聞いてもらえないのは非常に辛いことであるし、最初の DR グループが空中分解したどん底の初日の終わりのから DR 可決まで付き添ってくれたエジプトはとても心強かった。また会議が始まるずっと前からサポートしてくれた大学生の方々、OBOG の方々、先生、友人や両親、派遣団のみんなにも感謝したい。そして全日本大会の時から、事前には誰よりも一生懸命努力し、先輩の無理難題に応えてくれ、たくさんの意見を言い合い、また会議が始まつてからは一緒に試行錯誤を続け、切磋琢磨してきた優秀な後輩がいつも側にいたことが一番の幸運であったことは言うまでもない。



### 沼田 侑己

渋谷教育学園幕張高等学校 2 年

私は、今回の全米模擬国連大会への参加に際して、日本代表とか渋谷教育学園の名前を背負うというような責任感の傍ら、ふるさとに帰るような郷愁の思いをひそかにもっていた。

私は以前アメリカのカリフォルニア州に住んでいたが、日本に帰国した時は、なんとなく居心地が悪かった。考えてみれば、普通の日本人とは育った文化が違うのだから、考え方や性格が違っても当たり前だ。渋谷幕張高校には帰国生が多いので、居心地の悪い思いをすることはずいぶん減ったが、それでも私は他の帰国子女と仲良くする傾向がある。日本に馴染みきれない、だから私はニューヨークに「戻る」のをとても楽しみにしていた。

ところが、いざ戻ると、ニューヨークは全く期待に応じないのである。最初はなぜか理解ができなかった。

会議一日目は、アンモデレート・コーカスから始まった。私たちはルクセンブルク大使として参加していたので、まず EU のメンバーを集めて政策を話し合った。しかし、メンバーは集まつたもののなかなか思い通りにいかない。とにかく自己主張だけをする人、他人の主張に耳を貸さない人、他人の話を理解しようとする人、などなどが集まっても協力体制が整うはずがない。アンモデレートは数回に渡って行われたが、最終的に私たちのグループとして残ったのはわずかだった。EU 以外にも協力してくれる国を探したが、どうも話しが通じない。それは言語的な問題ではなく、どちらかというと文化的な問題だった。とにかく、最初に自己主張をする。相手の意見に耳を傾ける素振りでも見せたら負けというくらいの勢いだった。私たちが途方に暮れた。

こうして一日目は失敗に終わった。会議戦略が成功しなかったのが悔しかったのはもちろんのこと、私は「アメリカ」に失望もした。こんなに頑固で自己主張だけが強い文化だったのか。確かに国益を守ることは大事である。しかし、世界平和や世界秩序が存在した上で国益であ

ることを忘れてはいけない。会議に参加している人たちがみなそのように思っている様子は見られなかった。私はこう思った。「朱に交われば赤くなる」というが、それは皮肉な意味で本当である。気づいてはいなかったが、私は朱である日本に交じって確かに赤くなっていた。朱ではなく、赤、に染まったのである。馴染みきれなかった。しかし、赤くなってしまった今、アメリカの色に馴染むことも難しい。だから言ってみれば、私はアイデンティティ上の無国籍なのではないか。こう思うと私はますます落ち込んでいった。

二日目はペアの励ましもあり、どうにか気持ちを切り替えて臨むことができた。今度は、モデレートコーカスからセッションが始まった。幸いにもスピーチをすることことができた。すると、昨日まであれほど悪かった流れが忽然と良くなつたのである。スピーチを聞いて協力をしたいと思ってくれた人がたくさん集まり、だから決議案もほぼ思い通りに書けた。最終的に十個の決議案が提出され、そのうちの二つが可決された。私たちの決議案が可決された一つだった。決議案が通ったときは、言葉が見つからないほど嬉しかった。

こうして会議も無事終わり、日本にも無事帰国した。一日目の夜に思っていたことをもう一度よく考え直した。私はアイデンティティ上の無国籍だと思い込んでいたが、その正反対、つまり、多国籍だとも言える。このように考えるに逆に力になった。朱に交われば赤くなる。ならば、藍に交われば青くなる。そこでもう一つ、「青は藍より出でて藍より青し」ということわざを思い出した。(若干ニュアンスが違うのは見逃して欲しい。) 朱にも藍にもならなくとも、それを理解できるくらい赤く、そして超越できるほど青くなれることが大事だ。これから国際社会で活躍するためには、これ以上大切なことはないと思う。

最後になりましたが、今回の全米模擬国連大会に参加できたことをとても感謝しています。日本政府代表部の方に会えたこと、ブラジル・スペインをはじめとする世界中から来た人たちに会えたこと、そして、間接的にではありますが、私に大事な教訓を与えてくださったこと。



すべて、グローバル・クラスルーム日本委員会の皆様、メリルリンチ日本証券様、そして他にお世話になった人たち皆様のおかげです。ありがとうございました。

**衛藤 菜生**  
聖心女子高等学校 3年

約半年をかけて準備してきた全米大会を終えて、今は大きな達成感と共に、自分のあらゆる力量の足りなさを感じている。様々な期待と不安を抱えながら望んだこの大会で、私が得たものは多かった。特に、今冷静に振り返って注目したいのは、私の予想とは若干反する形で、私の英語力・行動力が通用した部分としなかった部分があったことだ。

会議前は、非公式討議で見られるような自由な交渉において、私が主張したいことが伝わるかどうか、相手の主張が聞き取れるかどうかが非常に心配であり、同時にモデレーテッドコーカスで見られるような形式ばった行動の方が大きな支障なく流れに乗れるのではないかと考えていた。

しかし実際は逆であるようだったのだ。会議が始まり、いくつかのスピーチが終わった後、アンモデレーテッドコーカスに入った。そこでは、話しかけると決めていた国々へ交渉に向かったのだが、相手が何を主張したいのか、そして自分が主張したいことが予想以上に理解でき、また伝えることができたと思う。特に、自分が準備してきた内容については相手に十分伝えることができたのではないだろうか。ただ、ここで感じたのは、いきなり深い内容に触れてしまったのではないかということだ。私たちはルクセンブルクとして今回のNPT再検討会議で追加議定書の普遍化を主な主張にしようとしていた。しかし、追加議定書の提案をしても、いくつかの国からは曖昧な反応しか返ってこなかったのだ。追加議定書の存在さえ知らない国もあったのではないかだろうか。ここで、深い知識がないと臨めない日本大会との違いを痛感した。しかし、もちろんこれに賛同してくれる国もあったので、この案を主張し続けていくことにした。その後も再びアンモデレーテッドコーカスがあったのだが、その前に交渉して手ごたえのあった国、協力できそうな国にメモを回し、決議案提出への最低数である7カ国と次のアンモデレーテッドコーカスで集まろうと約束を取り付けることができた。ただ、その後実際に集まつても、やはり英語力が及ばずうまくまと

めることはできず、それぞれがまた違う動きに戻ってしまったことが悔しかった。

その後ずっと続いたのはモデレーテッドコーカスだった。これは前から聞いていたとはいえ、その高い頻度、またいくつかの国のパフォーマンスのうまさに非常に驚いた。ここでの、会場全体に向けた発言を連続して行うための、会議の流れを把握する力、スピーチを即時に作る力は日本大会ではそれほど求められなかったもので、さらにそれを英語でこなさなければならず、予想以上に会議の流れに乗ることが難しかった。私たちは必死についていこうと、それぞれのトピックについて一度は発言するように努力し、その存在は少しづつアピールすることが出来たと思う。ただ、時に話の展開が早く、討議されている内容がわからずに対応しきれないこともあります、もどかしさを感じた。ただ、話し合われている内容をよく聞いてみると、かなり抽象的なことが、ある程度限られた国々の同じ主張を軸に繰り返されていた。そこで、より具体的な案を練っていこうということを呼びかけたが、それに対する反応は乏しく、私たちが目指すものと彼らが目指すものの差異を痛感した。実際、その後に配られた1つの決議案には、これまでに出ている条約や宣言に触れ、それを再確認するような文言もなければ、具体的な提案もされていなかった。シグナトリーとして参加していた自分たちの決議案に関しても、方針としては賛同できるものの、内容としては不十分だと二人で判断し、投票に際しては出ていた二本の決議案のどちらにもNoを投じることとした。

この初日の会議を終えて、自分たちの力不足や考え方の違いに若干落ち込むこととなったが、派遣団の皆との反省会で仲間の奮闘ぶりを聞いて再び頑張ろうと思い、二人で翌日にいかに自分たちが用意してきたことを出し切れるかを考えた。二日目には、初日の自分が出た会議の決議案に賛同できなかった分重要なのが、他の地域の会議から出てきた決議案の内容だった。そこで、配布されたそれぞれの決議案に急いで目を通し、より自分たちの意見に近いものを発見し、そのグループと交渉していくことにした。そこでは、追加議定書に関する文言をさらに盛り込むことができ、また意見を重ねていくうちにスポンサーとして参加すること

もできたので、初日にはあまり味わえなかった会議での達成感を得ることができた。また、二日目もモデレーテッドコーカスが中心で、さらに初日に出た決議案についての言及が中心だったのであまり発言の機会は得られなかつたが、ここで消極的になつてはならないと思い、機会を伺つてルクセンブルクとしてどのようにその決議案と関わっているかを述べることもできた。

こうして、初日には少し不安にもなったが二日目には私たちができる事を精一杯できたと思う。英語力、即応力の不足を実感しながらも、出来る限り発言をし、周りと関わろうとした私たちの努力は無駄ではなかつたはずだ。会議が終わつて、パートナーと二人で悔いることはないことを確認し合えた時はうれしかつた。ただ、英語が私よりもできるそのパートナーに頼りすぎてしまつた時があつたことや、決議案作成の中心になつた国々に積極的に交渉していくことができなかつたことが個人的な反省点だ。

今回私たちが担当したNPT再検討会議は、実際に同時に国連で開催されているものであり、それを思うととてもわくわくしたし、リサーチに関しては現状が刻一刻と変化していくので方針が立てづらい、ということもあったが、それも含めて模擬国連の醍醐味を存分に味わうことができた。その上で、この議題に関してルクセンブルクとしてはもちろん、私個人としても意見を持つことができ、国際問題のより一層の理解を深められた。さらに、今回一緒に渡米したパートナーはもちろん、日本の派遣団の皆、海外の高校生との出会いは非常に素晴らしいもので、今後の人生でもずっと大切にしていきたい仲間だ。日本大会を経て感じた以上に、これら全ての経験が、模擬国連という活動の中でこそ味わえるものだと再び実感し、こんな素晴らしいチャンスを得られたことに心から感謝したいと思う。また、この経験は、私の国際問題への関心をさらに高めてくれたし、人と交渉することに関するまた違つた見解を与えてくれた。それは厳しい現実を知ると同時に、その奥深さを知つたことでもある。そういう全てが、これから大学受験を終えても、その後の私の学習の根底にあることは間違ひなく、まだ具体的方法はわからないが、それを少しずつでも形にしていかなければならぬと感じた。

**寺井 綾乃**

聖心女子高等学校3年

2010年5月13日。初めて国連総会議場に足を踏み入れた時のことは今でも鮮明に覚えている。床外にもフカフカした床と、見上げるほど高い天井に圧倒されながら、私は驚きと興奮と緊張とが入り交ざった何ともいえない気持ちで開会式を迎えた。その後の二日間の会議は私にとって色々な意味で忘れ難い、いや、決して忘れることができないであろう経験であった。

ただ私にとって今回の全米大会において得たものは会議を通じてだけではなかった。ニューヨークを訪れるまでの約5ヶ月間、私の頭からNPT-核不拡散防止条約という言葉が消えた日は無いといっていいほど、自分なりに精一杯リサーチを進めた。英語というハンデがある以上、日本人である私には知識しか彼らに勝れるものはない、と信じていたからだ。しかしリサーチは困難を極めた。情報が足りなかった、というわけではない。そうではなくて、逆に情報があまりに多すぎたのだ。全米大会と同じように迫り来るNPT再検討会議に向けて世界の情勢は日々変わっていた。最初に書いたポジションペーパーの時の世界の流れと、米ロの新STARTの署名、核セキュリティサミットなどを経た後の世界の流れは大きく異なっており、ルクセンブルクとして提案する内容も多少変える必要があった。膨大な情報の中で本当に必要なものだけを吟味し、整理するのが模擬国連において重要なことの一つでもあるわけだが、私自身、情報の取捨選択とはこんなに難しいものであるのか、と痛感した機会であった。

だが、それら困難を乗り越えられたのは、なによりも世界が自分と同じ方向を見据え、同じ問題を議論し、同じゴールを目指しているという、何とも表現しがたい大きな喜びがあったからだ。これは模擬国連でしか得ることのできない体験だと思う。特にNPTに関しては実際に今年5月、同じニューヨークで5年に一度の再検討会議が行なわれ、私たちがグランドハイアットの会議室で議論しているまさにその瞬間に、目と鼻の先の国連本部で各大使たちが熱く議論している、という「同時進行」の議題であったため、本当に興奮した。軍縮や兵器

の問題になると、人道問題等と比べてどうしても高校生の自分との関わり、を実感することが難しくなるが、今回このような貴重な偶然を通じて、全日本大会の議題であった地雷問題以上に、核問題と自分という点について深く考えることができた。リサーチの間にも新聞の国際面を開くことが毎日本當に楽しみであったし、テレビで核という言葉が聞こえると無意識に聞いてしまう。それは全米大会が終わった今でも続いている、それこそ模擬国連のもうひとつの醍醐味であるのではないかと感じる。

しかしそれら知識を持って迎えた会議は、アメリカの高校生たちの圧倒的なパワーに押されてしまった二日間だったといえる。まず、英語という短期間ではどうにもならない大きな壁にぶつかり、そして強く主張してくる彼らの姿勢にただただ圧倒されるばかりであった。確かに英語、または言語のハンデというのは言い訳でしかないのかもしれない。しかし伝える手段がない以上、どんなアイディアを持っていたとしても何も意味をなさなくなってしまう。英語が弱いのは日本人として仕方のないことなのかもしれないが、これは長期的に努力をすれば才能の有無関係なしに確実に克服できる壁だと信じている。今回の大会を通じて私は、次こそ自分の意見を主張し、伝え、そして相手の意見も聞きつつとことん同年代のアメリカ人と討論したい、と本気で思った。この思いを決して忘れず、これから勉強に精進していきたい。

一方で幸運なことに一日目が地域ごとの会議であったため、他の会議と比べて発言する機会がたくさん与えられた。そうでなければ300人の人の中に埋もれて二日間を過ごしてしまったかもしれない。しかしあよそ50人の小さな会議だからこそ、ほとんどがモダレートコーカスで、強制的に自国の意見を主張しなければならず、それは私にとって本当に幸せなことだったと思う。そこでは自分の出来る限りの英語で、出来る限りみなに自分の立場を分かってもらえるように努力した。それは他のアメリカ人からすれば何を言っているか分からず、ぼろぼろだったかもしれない。しかし私にとっては三度と無い貴重な経験だった。

また、この核問題を扱った会議は、日本人と

しての自覚を再確認する機会でもあった。スピーチの際に、ほとんどの国が、「第二のHiroshimaとNagasakiを生み出してはいけない」というようなことを言っていた。そのときに私は素直に日本人として驚き、感動してしまったのだ。世界のHiroshimaとNagasakiの受け入れ方を実感したからだ。しかし同時に私は、原爆を落とされた唯一の国に生まれた者として、日本はさらに核に関する問題についてリーダーシップをとっているなければならないのだと改めて思った。たとえ私たちは原爆を体験していないても、核に関しては日本人だからこそ分かることがあるはずだと思う。今の日本はアメリカなど大国に主導権をとられがちだが、私たち日本の国民ももっと核問題について興味を持ち、一人一人が自分なりの確固とした意見を持つべきではないのか、と感じたのである。

全米大会ではある程度具体的な決議案が通った。そして5月28日に閉幕した本当のNPT再検討会議にて最終的に全会一致で採択された合意文書はあまり具体性が無い、と批判を受けている部分もある。しかし私はそれこそ本当の世界外交の難しさだと思う。高校生の模擬国連であるからこそ作ることのできる決議案と、国の利害をかけた場で作られる合意は違い、しかしそれは違っても仕方のないことなのではないか、と考える。そうでなければ高校生が模擬国連を行う意味がなくなってしまうからだ。ある意味理想的であったとしても一人一人が真剣に考えることに意味があるのだと思うのだ。私が高校生で模擬国連をして良かったと思える大きな理由に、いつも模擬国連を終えて感じるこのもやもや感をぜひ将来解消したいと思える点にある。今回の会議でも自分の実力の無さ、そして理想的な決議案にあまり納得できなかった。それは私にとって大きな目標として自分を支える柱となるのだ。日々の学校生活では同じ価値観、考え方の中、ぬるま湯につかたのように、こんな刺激になり、発奮させるようなチャンスはありません。しかし今回このような、自分を本当に刺激させてくれる貴重な機会を得られたことは私にとって本当に大きな喜びであった。

全米大会に向けた長い道のりは終わってしまったわけだが、この間私はたくさんのものを得た。もちろん今まで述べた通り会議や、準備

過程での経験もあるが、それよりも、生涯大切にしたい、かけがえの無い友人を得られたことが本当に嬉しい。学校の友達とも違う、ある意味深い面で同じ境遇を経てきた同志たちは私にとってこれから的人生必要不可欠な人々であることは間違いない。ニューヨークでの日々が私にとって何にも変えがたい素晴らしいものになったのも彼らの存在が大きい。

同時に引率の大学生、先生方、そして野田さんの助け、指導がなければ私のこの思い出ももっと浅いものとなっていたことだろう。この機会を借りて、この全米派遣団に関わったすべての方に心からの感謝を表したいと思う。

そして私はこのニューヨークで経験したたくさんのことの糧として、これから日々過ごしてゆきたい。



**柴原 一貴**

桐蔭学園中等教育学校 3 年

今回私達は、UNICEF においてルクセンブルク大使を務めました。話し合われた議題は「HIV/AIDS and young people」でした。

私達は、問題解決のために使える資金に注目しました。国際目標である Universal Access を達成するためには、年間 350 億ドル以上の資金が必要とされていますが、現在、3 分の 1 程度しか支出できていません。なぜなら、2008 年におきた世界恐慌の影響によって、各国が援助金を拠出しづらいという現状があるからです。これは、私たちが担当したルクセンブルクも例外ではなく、経済状況の悪化により ODA 拠出額が 2008 年より減少しており、援助金の増額は厳しいと考えられました。そこで私達は、「新しく、政策実行能力の無い決議案を作成するのではなく、現実的に実行可能な政策のみに絞るべきである」という基本姿勢で会議に臨みました。

会議の流れは、どのように子どもに教育を施すか、HIV 薬をどう患者に投与するか、NGO と国連と政府がどう協力していくかというものが論点となっていました。

結局、決議案は 4 本提出され、4 本とも可決されました。その中には、政策実行能力の低いものや、途上国の頭脳流出を引き起こすものなど、ルクセンブルクが反対していたものもありました。交渉失敗の原因是英語力でした。普段私たちが使用している日本語のように、自分の伝えたい言葉がすらすらと出て来ず、相手を説得することができなかったからです。会議中には、相手に意見が伝わらないことに恐怖心さえ抱きました。生まれて初めて言語の壁を感じた瞬間でした。会議前にリサーチを行い、考えたことを議場で主張することができなかったことが残念でなりません。

私は、世界のあるべき姿を追求するために大学で国際法を学びたいと思います。そして「HIV/AIDS and young people」という問題にどう向き合うべきか、再考したいと思っています。

最後になりますが、このような素晴らしい機会を与えて下さったスポンサーの皆様、サポートしてくださったすべての皆様に感謝します。ありがとうございました。

**富山 寛大**

桐蔭学園中等教育学校 3 年

今回の会議に参加するにあたり、私は主に情報収集とその分析を担当しました。今回、私が参加する会議は UNICEF の理事会で、議題は「HIV and young people」でした。HIV 問題とは本当に複雑なもので、HIV 感染の予防や、患者へのサポートだけでなく、差別・偏見、エイズ孤児、エイズ教育、さらにはそれらを行うための資金不足や人材の不足などが絡んでいます。私はかき集めた資料を元に、このような課題が絡み合う HIV 問題の根本には、やはり資金不足があるのではないかと思い、資金不足を無視した政策を排除し、現実性のある政策のみを実行する決議案を目指すことにしました。現に、2005 年に行われた国連エイズ特別総会では、資金不足が大きな論点の一つとなっていました。そこで資金不足が明確であることが示されたにも関わらず、拠出金額の分担については、先進国の反対によって成果文書に記述されませんでした。このような過去があることを踏まえ、UNICEF においても資金に関する議論は行われるだろうと予測し、それに沿った戦略を立てました。

また、戦略立案とは別に、英語の準備もしました。私とペアの 2 人に欠けているのは英語力でした。私たちは英語ができないならできないなりにと、公式発言のための英語の原稿を作り、さらに交渉のためのテンプレートを多く用意しました。会議がどのような流れに向いても対応できるように、あらゆるパターンを想定したテンプレートを、およそ 100 以上準備して、万全の体制を整えて会議に参加しました。

いざ会議に向かえばとても重いプレッシャーで、何かを発言する度に不安を感じていました。交渉のときには、交渉相手の熱意と英語に威圧感をどうしても感じてしまい、上手く交渉することができず、また議長の早い英語について行くことができず、議場の把握は困難なものでした。結果的には、議場では 4 つのグループが形成され、それぞれのグループが DR を提出しました。4 つの DR はどれも可決されましたが、私たちが望んでいた DR は 1 つしかなく、少し

残念な結果となってしまいました。

上手く会議で立ち回ることができなかつた大きな要因には、英語力というのはもちろんあると思いますが、それ以上に私には『勇気』が欠けていたのではないかと思います。日本人と異なり、外国人は社交性に長けていて、積極的な行動がやはり多いです。そのような彼らを目の当たりにし、怯んで英語あまり話しかけることができなかつたのは、大きな失態です。『勇気』がなければ国益を守ることもできませんし、外交もできません。国を背負うという、重いプレッシャーを跳ね返し、堂々と交渉しに行く姿こそ、大使と言えるのだと思います。

この全米大会は、参加できて本当に良かったと思っています。世界の高校生と、このようなレベルの高い会議ができたこと、英語の必要性を実感できたこと、そして自分たちの成長はまだ途中なのだと思ったことは、本当に良い体験でした。

最後になりますが、模擬国連という活動を支えてくれた日本模擬国連の方々、全米大会へと導いてくださったメリルリンチ日本証券の方々、共に全米大会へと渡った派遣団のみなさんには本当に感謝しています。ありがとうございました。



## 支援協力団体一覧

本派遣事業の実施にあたり多くの団体からご支援とご協力をいただきました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます。

(以下五十音順、敬称略)

### 後援

外務省

文部科学省

国際連合広報センター

日本国際連合協会

国際連合大学

### 協賛

メリルリンチ日本証券

## 会計報告

本派遣事業は、メリルリンチ日本証券により賄われました。ご支援いただき心より感謝申し上げます。

### 収入

メリルリンチ日本証券 寄付	3,050,000
合計	3,050,000

### 支出

渡航費	1,900,000
宿泊費	1,000,000
交通費	100,000
会議費他	50,000
合計	3,050,000

2010年6月13日  
グローバル・クラスルーム日本委員会



グローバル・クラスルーム第四期日本代表団の皆さん、ニューヨークではお疲れ様でした。遠く米国で、高度な内容の交渉を、しかも母国語ではない英語で立派にやり遂げた皆さんに心から敬意を表します。

皆さんの活躍は、日本代表の名にふさわしい立派なものでした。もちろん個人個人では後悔もあるでしょう。挫折感を味わった人もいるかもしれません。しかしそれらも経験です。ネガティブな経験であっても、次のステップへつながる貴重な財産です。

今後同じような大会に参加する可能性は限定的なのかもしれません、「本番」に参加する可能性は無限です。皆さんの前には未来が広がっています。経験を活かすチャンスはいくらでもあるのです。

「国際社会で活躍する日本人はもっと多くてもいい」——準備期間も含めこの大会の期間中に皆さんのが何度も耳にされた言葉だと思います。世界21カ国から約2,500人が参加した大会での経験が、将来、国際人となった皆さんの礎となっていたならば、これに勝る喜びはありません。

今回の全米大会参加にあたっては、準備期間に過去3回の全米大会の参加経験者たちが自分たちの経験を伝えるために駆けつけてくれました。グローバル・クラスルーム日本委員会が発足した2007年からの経験は、こうして毎年継承されています。今回の皆さんの経験は、日本代表団が過去三回の大会参加で蓄積した経験の上に成り立っているということもできるかもしれません。

皆さんも今回の経験を後輩たちに伝えてください。

グローバル・クラスルーム日本委員会による日本における高校生模擬国連にかかる活動は今後も続きます。高校生模擬国連のさらなる発展

のため、さらには日本の一層の国際化のため、より多くの高校生に視野を広げてもらうよう、ともにグローバル・クラスルームを盛り上げていくことができればと思っています。

メリルリンチ日本証券

バンク・オブ・アメリカは世界最大の金融機関の一つであり、個人、中小企業および大企業を顧客とし、銀行業務、投資業務、資産運用業務、その他の金融およびリスク管理のための商品やサービスを幅広く提供しています。バンク・オブ・アメリカは現在、バンクオブアメリカ・メリルリンチというグローバル・ブランドの下、投資銀行業務および金融市場業務を展開しています。

メリルリンチ日本証券は、バンクオブアメリカ・メリルリンチの日本における法人顧客事業の拠点として、事業会社、金融機関、政府機関など広範な法人顧客を対象に株式・債券のトレーディングを行い、資本市場業務、投資銀行業務、その他のアドバイザリー・サービスを提供しています。

メリルリンチ日本証券はグローバル・クラスルームの日本における創設メンバーであり、2007年の活動開始以来、高校生の模擬国連活動を支援しています。

## グローバル・クラスルーム日本委員会

(以下順不同、敬称略)

### アドバイザリー・ボード

#### 明石 康

(スリランカ平和構築・復旧・復興担当日本政府代表／元国連事務次長／日本国際連合協会副会長)

#### 小林 いずみ

(世界銀行グループ 多数国間投資保証機関(MIGA) 長官)

### 評議会

#### 星野 俊也 (議長)

(日本模擬国連創設者・OB／大阪大学 大学院公共政策研究科教授／前・国連日本政府代表部公使参事官)

#### 紀谷 昌彦

(日本模擬国連 OB／外務省国連企画調整課長)

#### 中満 泉

(日本模擬国連 OG／国際連合平和維持活動局政策・評価・訓練部長)

#### ジェイソン・ケンディ

(メリルリンチ日本証券広報部長)

#### 野田 司

(メリルリンチ日本証券広報部ヴァイス プレジデント)

#### 柿岡 俊一

(埼玉県立浦和第一女子高等学校 教諭)

#### 竹林 和彦

(渋谷教育学園渋谷高校 教諭)

#### 米山 宏

(公文国際学園中等部・高等部 教諭)

### 小檜山 歩 (理事長)

(グローバル・クラスルーム日本委員会理事長／国際基督教大学教養学部アーツサイエンス学科 3年)

### 元橋 一輝 (研究担当)

(グローバル・クラスルーム日本委員会理事／東京大学教養学部文科 I 類 3 年)

### 奥谷 聰子

(2008 年全米大会派遣生／慶應義塾大学法学部政治学科 2 年)

### 亀田 柚妃花

(2008 年全米大会派遣生／群馬大学医学部 2 年)

### 理事会

#### 小檜山 歩 (理事長)

(国際基督教大学教養学部アーツサイエンス学科 3 年)

#### 元橋 一輝 (研究担当)

(東京大学教養学部文科 I 類 3 年)

#### 杉村 詠史

(青山学院大学教育人間科学部教育学科 2 年)

#### 高橋 淳志

(政治経済学部 国際政治経済学科 2 年)

#### 関 龍

(獨協大学法学部国際関係法学科 4 年／2009 年度理事長)

#### 長崎 秀史

(早稲田大学教育学部教育学科 4 年／2009 年度研究担当)

### 事務局連絡先

E-mail: info@jcgc.jp

## おわりに

国連は国際社会の縮団です。それは、世界192の加盟国による最も普遍的な議論の場であり、まさに「人類の議会」(国連の歴史的展開を描いたイエール大学のポール・ケネディ教授の著作のタイトル)と言えるものです。国連での会議外交では、各国の国益が否応なくぶつかり合う場面にも多く出くわします。ですが、同時に、各国が自らの国益を見極めながらも、国際社会全体の共通利益を探り、一国では解決不能の諸問題に共同で対処していく、創造的・建設的なプロセスが繰り広げられる場でもあります。こうしたプロセスで物を言うのは、議題となる問題への深い知識や洞察、高度の判断力・交渉力そしてコミュニケーション能力などです。模擬国連は、知識とスキルをもとに、立場や考え方を異にする人々の間で、積極的な国際協力を実現するための合意形成を進めるエクササイズとして、とても有益なものです。

今回日本から参加した若い「大使」たちは、ニューヨークにおいて本物の国連を間近に実感しながら、教科書では学ぶことのできない多くのことを体験し、これから学びと研鑽の糧を得て帰国しました。

私たちの暮らす世界は、恐ろしいほどのスピードで変革しています。既存の考え方によらず、創造的に、ダイナミックに課題に取り組み、世界の人々と協力し、またリーダーシップを発揮できる人材を日本からも数多く出す必要があります。私たちは、ニューヨークでの模擬国連会議に高校生を派遣する事業を、そのための小さな、しかし重要な活動のひとつと位置づけています。参加高校生が持ち帰る経験は、国連という限られた場のみならず、広く外交、ビジネス、研究などの場で有益なものであると確信しています。

米国国連協会からのご厚意とメリルリンチ日本証券のご支援により、少数の有志によるグローバル・クラスルーム日本委員会が始めた高校生の日本代表団派遣支援事業は今回で4回目となりました。今回も代表団にご参加くださった各校のトップを含む教職員各位、保護者の皆様、そして生徒さんたちご自身がそれぞれ責任ある

姿勢と冷静なご判断を胸に行動し、何ら問題なく派遣事業を終えられ、さらに優秀な業績を残してこられたことを私たち評議員は、心からの感謝と感激の思いで受け止めました。ありがとうございました。

また、毎回の派遣事業には大学生の全国組織である日本模擬国連による運営が不可欠ですが、小檜山理事長以下、きわめて誠実かつ効果的に準備に取り組んでくださったことに改めて厚く御礼を申し上げたいと思います。本年度からは、過去に全米大会に参加した「卒業生」たちがグローバル・クラスルームの運営に携わってくれることになりました。このOBOG会の今後の活躍にも期待しています。さらに、厳しいビジネス環境にあっても本事業への支援をお続けくださっている協賛団体には感謝の言葉もございません。私たちとしては、多くの皆様のご支援とご期待を励みとし、グローバル・クラスルーム事業の更なる発展に一層の努力をしていく所存です。どうぞ今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会  
評議会議長 星野 俊也

## 参考

### 関連リンク

米国国連協会／UNA-USA  
<http://www.unausa.org/>

グローバル・クラスルーム／  
Global Classrooms©  
<http://www.unausa.org/globalclassrooms>

2010 年全米高校模擬国連大会／  
UNA-USA Model UN Conference 2009  
<http://www.unausa.org/unausamun>

日本模擬国連／Japan Model UN Society  
<http://jmun.org/>

グローバル・クラスルーム日本委員会／  
Japan Committee for Global Classrooms  
<http://jmun.org/ge/>

メリルリンチ日本証券／  
Merrill Lynch Japan Securities  
<http://www.japan.ml.com/>

### 関連報道

共同通信  
「日本の高校2校に優秀賞 NYの模擬国連大会」 5/18

産経新聞、東奥日報、秋田魁新報、岩手日報、  
福島民報、北日本新聞、下野新聞、茨城新聞、  
神奈川新聞、東京新聞、山梨日日新聞、中日新聞、  
静岡新聞、北國新聞、富山新聞、福井新聞、  
京都新聞、神戸新聞、山陽新聞、四国新聞、徳島新聞、  
高知新聞、西日本新聞、宮崎日日新聞、  
佐賀新聞、琉球新報  
等が上記記事をウェブ・紙面等で報道

## <MEMO>

## <MEMO>



グローバル・クラスルーム日本委員会  
Japan Committee for Global Classrooms

